特別寄稿：田んぼ体験実践記録

稲とのふれあい

足立区立鹿浜こども園

足立区立鹿浜こども園では、毎年、稲の苗を植え、収穫し、脱穀・精米し、ご飯に炊いて食べるまでの１年間を通した「稲とのふれあい」活動を続けてきました。

今回、その子どもたちの体験する様子を発表させていただきました。

稲とのふれあい

足立区立鹿浜こども園

今年で開園１０年を迎える鹿浜こども園では、開園当初からのらえもんさんにご指導・ご協力をいただき、子どもたちは稲と触れ合う経験をしています。こども園では季節を感じることができるように四季折々の草花を育てていますが、中でも「食」に直結する稲の栽培経験を通して、四季の移り変わりを知り、子どもたちに身近な「お米」をより身近に感じ、「食」を楽しんでほしいと考えています。

４月　新年度がスタートすると、泥の感触を楽しみながら早速土づくりを開始します。

５月　のらえもんさんから稲を送っていただきました。

初めて見る苗は「なんの草？」と、子どもたちは疑問と興味でいっぱいです。

いよいよ田植えを経験します。「本当にお米になるのかな？？」と、子どもたちは不思議そうに苗を眺めていました。

グループごとに田植えを行い、自分達で描いた目印を貼って稲の生長を見守ります。初めは小さかった稲が、ぐんぐん大きくなりました。

9月　穂が実り、子どもたちは「何かできてる！」「実がついてる！」と稲の変化や生長に気付き、声をあげていました。

稲が黄金色になったらいよいよ稲刈りです。稲刈りの一週間くらい前から、土の水を抜いて準備をしておきます。

刈った稲はカラカラになるまで干しておきます。

時々スズメのお客さんも来ましたが、子どもたちは「食べちゃダメ！」や「ちょっとにしてね」と見守り、何とか脱穀の時期を迎えました。

刈った稲はカラカラになるまで干しておきます。

時々スズメのお客さんも来ましたが、子どもたちは「食べちゃダメ！」や「ちょっとにしてね」と見守り、何とか脱穀の時期を迎えました。

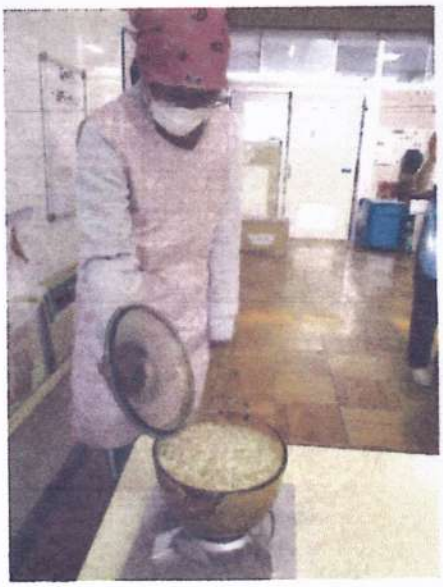
12 月　牛乳パックを使ってお米の粒を取っていきます。自分たちで育てたお米なので、一粒一粒大切に扱い、丁寧に脱穀していました。

脱穀したお米はペットボトルに移し替えて保管します。「こんなに採れた！！」と競うように、楽しみながら作業をしていました。

落ちた一粒も無駄にしないように、丁寧に作業を進めていました。

1 月　精米作業を行いました。すり鉢にお米を入れて、テニスボールで擦ると白いお米が見えてきます。
子どもたちは「あ！お米だ！」と改めて実感していました。

2月　いよいよ「お米を食べよう！」ということになりました。『しかはまい』と名付けられた、鹿浜こども園産のお米を子どもたちの前で炊いてみることになりました。栄養士に協力してもらい、ガラス鍋で炊いてもらいました。



ぐつぐつと煮立ち、泡が出始めると子どもたちは「あ！ぶくぶくしてきた！！」と興味津々で見入っていました。段々と香るお米のいい匂いに「お腹空いてきた！」の声もあがり、盛り上がった炊飯体験。お米の炊けた鍋のふたを栄養士が開け、湯気がふわっとあがると、子どもたちから歓声があがりました。

自分たちで育てたお米、そして目の前で炊けた炊き立てのご飯をいただきました！「最高！」「美味しい！！」の声が聞かれました。「育てる」ということは、思い通りにならないこともたくさんありますが、それだけに思い入れも強く、余計に美味しく感じたのでしょう。

『しかはまい』の栽培を通して…　～職員の声より～

脱穀の時に、「コンビニのおにぎりも、こうして脱穀しているのかな？大変だよね。」という園児がおり、米を育てて食べるまでの大変さを実感しているのがわかりました。しかはまいを食べた後も、「一粒一粒に神様がいるからね。」とお米一粒を大切に思うようになった園児もおり、食べ物が口に入るまでの大変さを感じたり、食べ物を大切にする気持ちをもったりするきっかけとなり、栽培を行ってよかったと思っています。

古高先生、今年も稲をくださりありがとうございます！今後ともどうぞよろしくお願いいたします。　（5歳児ぞう組担任）

苗植えの時、「大きくなあれ！」「楽しみだね！」と友達と話し、その後の生長や色の変化、粒の大きさの変化などにも敏感に気付いていた子ども達。稲刈り後の脱穀も「早く食べたいね」「美味しいよね、きっと」と協力して進めていました。大変な作業ではありましたが、期待を膨らませて取り組むことができました。自分たちで育てたお米を食べた後は、給食の時もお米を一粒も残さないようにと、丁寧に気を付けて食べる子が見られるようになったのが印象的です。

栽培を体験したからこその、子どもたちの姿ではないでしょうか。（5歳児きりん組担任）

一粒のありがたみを感じて

『稲を育てて、できたお米を食べる』

当たり前のように食卓にご飯が並び、おいしく食べられるこの時代に、一から育てたお米を食べるというこの活動は、子どもたちにとっては大変貴重な体験だろう。

苗を植える時の冷たい泥の感触、青々とした苗が黄金色の稲に変化し籾が膨らんでいく様子、束ねた稲をザクッと刈る感触、そしてガラス鍋で炊くお米のいい匂いやおいしさなど、子どもたちの五感を大いに刺激し、知的好奇心が高められるような豊かな実体験となった。

中にはとても苦労した作業もあった。すり鉢とテニスボールを使っての精米は本当に地道な作業で、頑張った割には目に見える成果が少ない。なかなか進まない作業に、早く食べたいという思いと、もっと遊んでいたいという気持ちで揺れ、葛藤を味わった子もいた。そのうち、もみ殻が取れて精米されたお米が一粒ずつ着実に増えていくと、遅れている友達を励ましたり手助けしたりしてくれる子が現れて、残りわずかとなった時には、学級が一体となって精米終了というゴールへ向け一気に加速していった。あきらめずに取り組んでいく粘り強さと、学級の仲間意識が一段と育ったと感じる姿であった。

長い時間をかけて稲の生長を見守ってきた子どもたち。自分たちで育ててきたからこそ、最後まで根気強くやり抜く力につながったに違いない。炊きあがった『しかはまい』の一粒一粒をおいしそうに、大切に、頬張る姿を見て、こちらまで幸せな気持ちになった。これからも、子どもたちのためにぜひ継続して取り組んでいきたい。

鹿浜こども園長

最後に…
毎年、こんなすてきな活動にお力を貸してくださる古高先生に感謝申し上げます！
ありがとうございました！